

タイは今、国中が悲しみに包まれている。

国民から絶大な尊敬を集め、愛されたプミポン国王が亡くなられたからだ。

プミポン国王は農村の振興や貧困対策に力を注がれ、タイの経済発展に貢献。これまで幾度もあった政治危機や国内の混乱を自ら解決された偉大な王で知られた。在位期間は70年以上に及び、存命する世界の君主の中で最長だったといい、日本の皇室とも深い関係があった。

そんな国王の訃報に接し、今から29年前、1987年のタイ文化センターの開場記念公演で團伊玖磨先生のオペラ「夕鶴」が上演されたときのことを思い出した。

そのとき、團先生の副指揮を仰せつかったのが私の当時の婚約者、現田茂夫だった。

現田は團先生の代わりに毎月、タイのバンコクに渡り、

## プミポン国王との思い出……



現地のオーケストラや子供のコーラスの指導を行っていた。が、午後の約束の練習時刻になっても一向に人は集まらず、日が落ちた頃からパラパラと人が集まり、ようやく夜も更けた頃に全員到着し、練習開始というほほえましいエピソードにも遭遇した。

また、新しい劇場はそれは見事な総大理石造りで、客席も実に豪華だった。2階の両サイドには特別席の椅子が幾つも設えてあったが、なぜか、2階の中央だけは何も無い。現田はその空間は工事の遅れだと思いこんでいたらしい。

ところが、その場所こそ、当日、椅子ごとご入場される

プミポン国王の玉座と知り、度肝を抜かれたそうだ。

歴史的な公演は成功裏に終わり、盛大なる祝宴が待っていた。しかし、現田は終演後、すぐさま飛行機に乗せていただいた上、大変な待遇を受けて東京までたどり着いた。

そのおかげで、私たちは後援会のための結婚披露宴を予定通り行えたのだ。プミポン国王、そして團伊玖磨先生は私たちの恩人なのである。心より御冥福をお祈りしたい。

(さとう・しのぶ＝声楽家)

—毎月第3金曜日掲載

